

書評

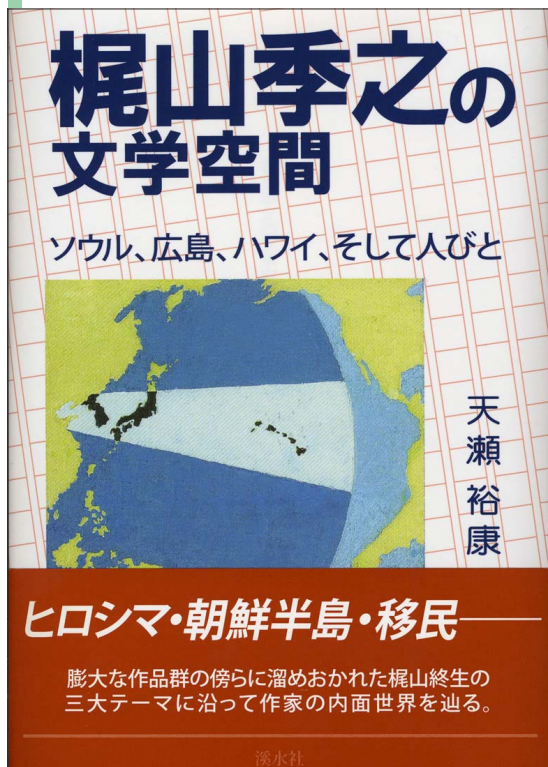
梶山季之の文学空間

ソウル、広島、ハワイ、そして人びと

著者 天瀬 裕康

発行所 溪水社

広島県医師会常任理事 新本 稔



「梶山季之の文学空間」

著者の天瀬裕康（あませ・ひろやす）はペンネームで、本名は渡辺晋（すすむ）、岡山大学大学院医学研究科卒の医師である。文章も書かれるが、絵画も描かれる文芸人である。ちなみに本書の表装画は、著者自らが描かれたものである。

梶山季之（としゆき）（1930-75年）の文学作品の背景にある、彼の存在した空間を、大きくソウル、広島、ハワイに配分して分析している。

梶山季之は韓国のソウルで生まれた。小学校入学後、早くから「小説家になることが夢」で

あったという。ソウルでの生活が一連の朝鮮小説の原点となっており、多数の作品群に集結されている。

朝鮮半島の戦前の話、終戦当時が「朝鮮もの」のなかにあるが、第二次世界大戦終了後の朝鮮半島を二分にされた時の日本人としての引き揚げ者の心の中は、梶山にしか書けなかったことであろう。

広島との関わりは、戦後ソウルより引き揚げ、広島を踏んだときからである。原爆の問題を避けて通ることはできなかった。広島での原爆文学の立ち上がりは遅かったと言う。彼の初期原爆小説の中に、ABCC（現・放射線影響研究所）を題材としたものがある。職員がストライキをするが、その原因となったのが、民族的な感情問題であった。

昭和40年代は後期の原爆小説があるが、重いテーマのものである。

梶山は、広島ペンクラブ（昭和24年誕生）や広島文学協会の創立に尽力する。

ハワイは海外という範疇に入るものであろう。移民の問題もある。朝鮮半島や広島の前爆に関する作品と比べれば、いくらか軽い感じがしないでもないと言う。しかし、社会、経済問題にも興味を持っていたから、これらの点からも小説を書いた。

昭和50年5月11日梶山は取材先の香港で客死した。享年45歳であった。著者は「学術書ではないので、気楽に読んでいただきたい」と、初めの言葉に書かれているが、立派な論文形式であり、梶山文学を読んだり、研究するときの良き羅針盤となるものである。文献を集められた努力に敬服する。